

**胃底腺ポリープー粘液組織化学、
立体計測、MIB-1 免疫組織化学
を用いた形態的研究**

Gastric fundic gland polyps: A morphological study including mucin histochemistry, stereometry, and MIB-1 immunohistochemistry: *Odze RD, Marcial FMA, Antonioli D, et al.* (Hum Pathol 27: 896-903, 1996)

胃底腺ポリープ (fundic gland polyp) は、胃底腺領域に発生する特徴的な腺の増生と拡張を示すポリープである。このポリープは過誤腫であるという説がこれまで主流であったが、その発生の様式は現在まで不明であった。加えて家族性大腸腺腫症 (FAP) の患者に胃底腺ポリープが高頻度で発生することも知られて

おり、FAP でない人のものとの違いはこれまで明らかではなかった。本論文では胃底腺ポリープにおける増殖細胞の分布と粘液組織化学的所見から、FAP でのものとの違いとその組織発生を考察している。

用いた材料はポリペクトミーにより切除された 77 例で、うち 15 例が FAP の患者からのものである。組織学的に全体の 95% の例に腺の微小嚢胞が、86% の例に腺周囲の平滑筋の過形成が認められ、MIB-1 の免疫組織化学で同定した増殖細胞は、通常の胃粘膜の増殖帯に加えて微小嚢胞に分布していた。中性ムチン、シアロムチン、スルホムチンの染色性は正常の胃底腺に類似していた。これらの所見は FAP と非 FAP の人との差はみられなかった。微小嚢胞の量も 2 群間で差はみられなか

った。これらの結果から著者は、FAP と非 FAP の胃底腺ポリープは同じものであり、その特徴的な微小嚢胞の形成には異所性の増殖細胞と平滑筋の増生が関与しているものと結論している。

【訳者コメント】 普段あまり注目を引かない胃底腺ポリープであるが、単なる過形成ではなく異所性の細胞増殖がその病変形成に関与していることを示した点が、組織発生の一モデルとして興味深い。日常、過形成性ポリープと胃底腺ポリープは混同されて用いられることがあるが、異なる病変であることが示されている。大腸の過形成性ポリープとともに用語の再認識が必要であることに加え、これらの病変の本質が何であるか興味深いところである。

(北里大学病理 三上 哲夫 抄)